

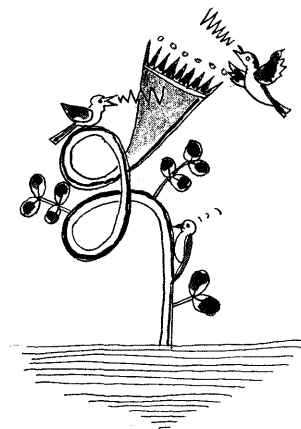
ブルガリアで考えたこと

津守 真

一九九二年四月二十日から二十四日まで、ユネスコとブルガリア文部省の共同プロジェクト「家庭および保育施設における子どもと大人との相互関係」に関する専門家会議がブルガリアのソフィアで開催され、私も招かれて参加した。OMEPの世界総裁であるバルケ女史、その他、スウェーデン、デンマーク、フランス、ドイツ、ユーゴスラヴィア、イギリス、カナダ、マセドニアと、それから、ブルガリア国内の代表者と、合計20〜30名程の小さな会議だった。ブルガリアは、東欧諸国の中でもソ連寄りの国として知られているが、ソ連の崩壊以来、

政治的にも社会経済的にも大変動の中にある。そういう状況の中で、他国から人を招いて、教育に関する国際会議を開催する心意気に私は敬服した。

会議も宿舎も、市内から車で二十分程の郊外にあるホテル「モスクワ」で行われた。かつてソ連の高官たちの泊ったホテルというが、日本のホテルからみれば粗末な造りで、私共の泊った十四階にはお湯も出なかった。市内には十八・九世紀に建てられた石造の立派な建物が多くあったが、壁がはがれたままのものも多く、店の



シヨーウィンドウには殆ど物が並べられておらず、ウィーンから飛行機で一時間二十分の場所なのに、まるで違う世界に来たように感じられた。

会議の第一日目は、ブルガリアの専門家たちの報告にあてられた。だれもが、ブルガリアの現在当面している危機について語った。教育面にもこれは波及している。失業者が毎月増加しており、職を失う母親も多い。保育所はこれまで政府が保障していたが、政府がそれを支える財力がなくなり、家庭にいる母親も増加して、閉鎖される保育所も増している。その反面、未婚の母親がふえている。そして赤ん坊を生むと親はどこかに消えてしまふという。その結果、両親のいない幼児の施設が必要は増している。また家庭を失った子ども達の暴力も問題になっている。他方、子どもに対して「漠然とした未来への過大な期待」も増している。このような急激な社会変化の中で教育と育児はどうしたらよいか分からないというのが、共通に語られたことであった。

第二日目の午前は保育施設の見学にあてられた。最初

の施設は親のいない子どものためのホームであった。三階建てで三角屋根の普通の住宅形式で、立派な建物だった。三歳から五歳まで約30名の子ども達が住むのには十分なスペースと設備であった。美しい民族衣裳をつけた男児と女児が、一人は花束を持ち、一人は大きなお盆にパンをのせて出迎えてくれた。私共訪問者は、パンをひとちぎりとり、小さな花束を胸につけて部屋に入る。私共を待っていた子どもたちは、輪になって遊戯をしたり、歌をうたって笑顔をふりまいた。二人だけ輪の中に入らないで座ったままの子どもの傍には、先生らしい大人が脇について座っていた。透명한衝立ての向う側は寝室になっていて、小さなベッドが並んでいるのが見えた。三階には音楽室や体育室もあり、地階にはプールもあって、一般の人々の暮らしに比してむしろぜいたくに見えた。生活の全体には管理されている厳しさが伺えた。帰り際に、女性の園長から、今日、この子たちは訪問者を迎えて、だれが自分を養子として、引き取りにきてくれたのかと期待をもって見ていたと聞かされた。私共は、今日の子ども達の笑顔を思い浮べて胸が痛んだ。

けれど、どうしてもしようがない重さを抱いて次の施設に向かった。

次の施設は〇、三歳の子どもの達のホームで、これも普通の住宅様式で広さも設備も十分に思われた。原則としてはガラス越しに見るようになっていたが、よちよち歩きの子どもが近寄ってきて戸を叩くので、どうしても入って相手をしてしまう。一緒にいったヨーロッパの人たちも同様で、あちこちで一緒に遊ぶ人々の群れになった。最初にマスクをするかとたずねられたが、訪問者はだれもそれを受取らなかったのは当然とは言え、好感がもてた。それは目の下から胸のあたりまで垂れ下がる大きな布のマスクだった。園長は女性の医師である。年齢別に6、7人の子どものグループにほぼ同数の大人が、六時間を単位として交替制をとっていた。それぞれの大人が、自分の好きな子を担当して選ぶ。子どもの側から言えば、一日に三人位の大人が交替するが、毎日同じ大人から世話を受けることになる。そういう点ではまあ細かい配慮がなされていた。

三歳までの施設、六歳までの施設、小学生の施設と

はっきり分かれていて、年齢がくると次の施設に移らねばならない。人も環境も全く変わってしまう。この子ども達にとってはその度に変な思いをすることになるのだろう。それを理解して支える人間関係はあるのだろうかと心配になった。

ソフィアには、このような子どもたちの施設が30、40あるという。私共のためにと急に幼稚園見学を加えてくれたが、一日十時間の幼稚園で、最近はず後になると家に帰る子どもも増えているという。

第二日目の午後と第三日目は、外国の訪問者のレポートの番だった。ユーゴの人は報告と共にビデオを見せてくれたが、その自由な保育を見せてもらうと、幼児教育には国境がないことを改めて考えさせられ、新聞では内戦の混乱を知らされているこの国で、子どもの仕事をしている人がよく頑張っていると思った。

私はブルガリアの危機を見聞し、日本の国の戦後直後を思い出し、しかしだれもがひとしく困窮の中にあつたあの時代は青年にとっては生き甲斐のある時代であつたことを冒頭に述べて、「表現と理解」について話した。

子どもに対するきめ細かい感受性がいまの時代に求められていることが、その後の討論でいろいろの人から述べられて心強く感じた。

いま、四日間のセミナーを終えて、私は、今回のセミナーを終始リードされたソフィア大学の教授、イワン・ディミトロフ氏の最初の発題を意味深く思い返している。そこでは次のようなことが述べられていた。

「われわれの生きている時代は、その力動性、深さ及び広さにおいて、歴史上未だ曾てない、経済的、生態的、社会・心理的变化に直面しています。技術の分野の著しい進歩と共に、人間の環境と生活の上で新たな挑戦を受けています。その中において、子ども達の人間性の発達を確かなものにせねばなりません。その共通の関心は、国際児童年（一九七九）及び、子どもの権利条約の批准（一九八九）に示されています。いまや、人間性の進歩のために、子どもを第一優先順位にすること、また人間の失敗の結果の苦しみを受けるのには子どもを最後の順位にするという、新しい倫理基準が必要とされています。」

ます。」

「移民、失業、疾病、自然災害などが、何百万人もの人々とその家族の伝統文化にも影響を及ぼしています。中でも幼い子ども達は最も感受性が鋭く、また保護の外にあります。その情緒的、知的、社会的発達のために、家庭は最も人間的で好ましい環境でありつづけなければなりません。」

「現代の社会変化は、家族、家庭、両親のない子ども達の数を増加させつつあります。子ども達は、身体的に生存するためにわれわれの慈善を必要としているだけではなく、彼らが精神的に発達するように、われわれの愛とコミュニケーションを必要としています。科学と実践活動の分野において、人々の努力を国際的にひとつに集めることは、現代の問題の解決に必須なことです。」

もうひとつ印象に残ったことがある。

会議の始まる前晩、夕食の席で、マセドニアの代表の人が、平和とは何だろう、平和教育とは何かを熱っぽく

語り始めた。年配の婦人だが、髪を刈り上げた血色の良い人である。最近、ロシアおよび東欧諸国は次々に分裂し、小さな共和国が独立してゆく。東と西の対立がなくなり平和になったかというそうではない。民族によって国が分裂し、互いの間の戦争も絶えない。冷戦が終わった現在、平和とは何かが分からなくなってきたと言う。私はマセドニアという国があったかしらと確かになくなってきた。きくと、古くからのマセドニアは、近年は政治的に分割されて、一部はユーゴスラビアに、一部はギリシアに、一部はブルガリアに属しているとのことであった。オルガ・ムラゼヴァ・スカリック女史は、ギリシアに属するのだという。どこの国でも最近は更に家族の崩壊がすすみ、子どもを守れない家庭も増えている。分裂は国から民族へ、更に家庭へと進む。一体どこまで分裂するのだろうか。自分にはどこかで統一共同体が必要だと思えるのだが、どこにそれが求められるのか。こういう時代になって平和教育とは一体どう考えたらよいのだろうか。戦争がないだけではいだろうか。四月とはいえ、薄寒く照明も暗い、ホテルモスクワの食堂

で、現実にも民族の分裂の中であり、人々のアイデンティティが危機にある国の人から直接に聞く話には、私共は外国にきた緊張感を覚えた。この人の家は、ギリシアのテサロニキの近くで、ソフィアからはバスで三時間程の距離だという。

会議が終わった翌日、私共はブルガリアの聖地といわれるギリシア正教のリラの僧院に案内された。それはテサロニキに通じる古い街道の途中から山地に少し入った所にあり、テサロニキまで一二〇キロ程の地であった。そこに向かう道の両側は緑の草地がつづき、はじめはゴルフ場かと思ったが、馬や羊がところどころに群をなしていた。ブルガリアといえば、日本ではヨーグルトの名称でしか知られていないが、ここは新約聖書以来の歴史をもつ古い土地であった。

日本に帰った翌日の新聞には、ユーゴスラビアが三つの共和国に分裂したことが報じられていた。その中にマセドニアの名前があった。

(愛育養護学校)